

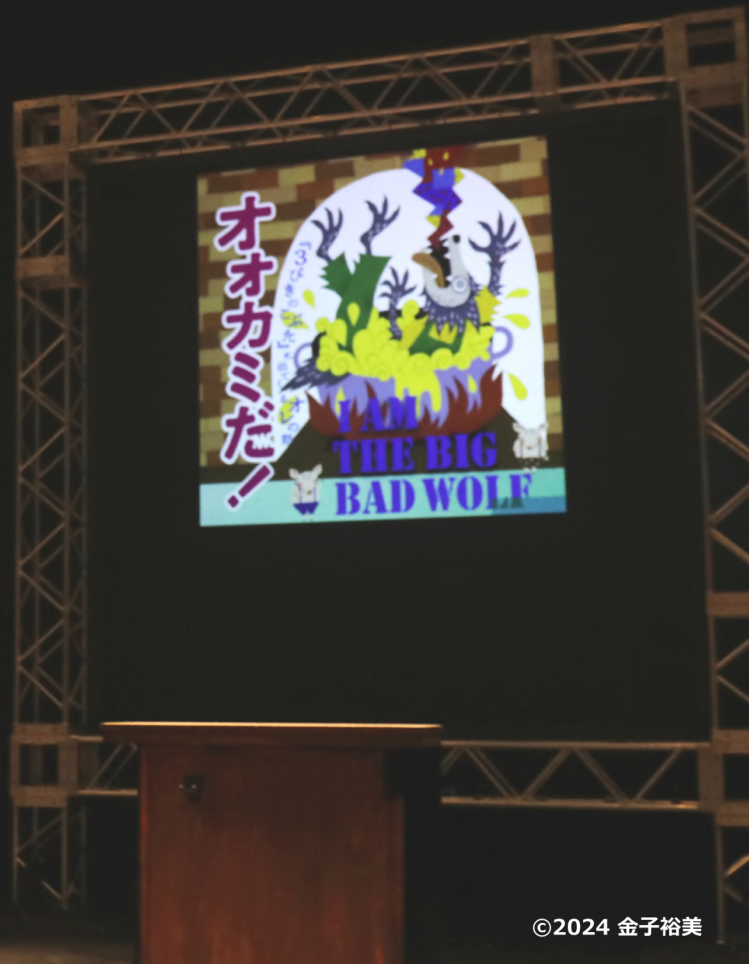


DRAMA かながわ No.92

Theater Association of Kanagawa July 2024

TAK in KAAT 「ヨルノハテのショーケース」

2024年度 神奈川県演劇連盟総会／芝居塾2024情報／
劇団探訪 劇団年輪篇、劇団コピュラ篇／資料室だよりほか



TAK in KAAT

『ヨルノハテのショーケース』

2024年4月17日(水)～21日(日) KAAT神奈川芸術劇場 大スタジオ



©2024 金子裕美

【総評】文：岡島哲也（ヨルノハテの劇場）

今回の春のTAK in KAATを担当できたことはとても良い経験となりました。この場をお借りし、心よりお礼申し上げます。ご覧いただいた皆様、支えていただいた皆様、本当にありがとうございました。

■作品づくり

ヨルノハテの劇場では作品に寄り添い育むことでレパートリーシアターの実現を目指しています。今回のショーケースでは「ヨコハマからセカイへ」と銘打ち、過去に作り上げた2作品と今後のレパートリーの実験を兼ねた1作品を日替わり上演いたしました。『水曜日の夜』ではチェリストの五十嵐あさかさんを迎え演奏会を開きました。ケッチさん、山崎薫さんとのコラボレーションは劇の可能性を広げる上演となりました。『オオカミだ!』はケッチさんと2023年に初演し、学校公演も行っているキッズプログラムです。その時は冒頭に使用する紙芝居が見えにくいという指摘を頂きましたので、今回はスクリーンとプロジェクターを使用することでクリアにし、作品の輪郭をさらに明確にすることができたと感じています。『はまべのうた』は2018年から上演を重ねている人形を使った一人芝居です。今回はコンサートスタイルに変更し、山崎薫さんと育ててきた作品が新たな展開に入ったと実感することができました。

■稽古期間

創作過程は中小スタジオを4月9日(火)から15日(月)までの長い期間を稽古場として使用させていただき、贅沢な時間を過ごしました。中小スタジオはKAAT神奈川芸術劇場・ホールの実寸稽古ができる大きなスタジオで、大スタジオの舞台面と客席面がすっぽりと収まる大きさです。今回の稽古では中小スタジオを2面使いし、各演目を円滑に稽古することが出来ました。片面には持ち込んだトラス(高さ4.2m×幅3.6m)にスクリーンを張り込んで『オオカミだ!』の稽古をメインに使用し、『水曜日の夜』でも使用しました。もう片面にはステージとピアノを常設し『はまべのうた』専用としました。内容の異なる作品の稽古において飾り

換えの手間が省けたことは、稽古時間の短縮にもつながり、ストレスを感じることなく作品づくりに没頭できました。こうしてスクリーンを使った影の演出は大スタジオでの稽古から生まれました。

■会場入りから本番へ

4月16日(火)から大スタジオに入り劇場仕込みでした。はじめに舞台上に集合し、劇場スタッフとカンパニークルーが一堂に会し朝礼を行います。安全に公演を行うために今後のスケジュールと舞台使用時の注意事項を確認します。朝礼でお互いの顔と名前を知ることは作品づくりの上でも大事な行事です。

その後は搬入と中小スタジオからの道具を移動し、大スタジオの舞台仕込みへと入って行きました。今回は客席前方の3列を埋めて使用し、最前列席と舞台が地続きとなる奥行きある空間がお客様を迎えます。

スケジュールは各作品の明かり作りとリハーサルが入り組んでいましたが、劇場スタッフとカンパニークルーの連携がとてもよく、17日(水)からの各ステージも事故なく無事に終わることが出来ました。

■公演を終えて

各作品ともお客様のあたたかな拍手に包まれていたことは感謝の限りです。広々とした空間に一人屹立するそれぞれの演者の姿に勇気と希望をもらいました。

しかし広報宣伝の力が足りず、集客には苦戦をしました。観劇の可能性があったお客様に、公演案内を届けることが出来なかったことは悔やまれてなりません。今後の課題として広報宣伝力の強化を図っていきたいと思っています。

TAK in KAATは劇場との連携を強固にすることで、KAAT神奈川芸術劇場の潤沢な設備を利用し、作品を高水準なものとして届けることができる素晴らしい機会だと感じています。今後も「ヨコハマからセカイへ」思いを馳せて作品を届けていきたいと思っています。



©2024 金子裕美

ヨルノハテの劇場を観るのは初めてでした。KAATで3作品を日替わりで上演。演出は、唐ゼミ主宰の中野敦之。

- ①『水曜日の夜』：演劇作品での活躍も著しいチェリストによるゲストとのコラボも興味深い演奏会。
- ②『オオカミだ!』：年齢も言語も問わず楽しめる、元が～まるちょぼ（パントマイムユニット）のケッチによるキッズ・プログラム。
- ③『はまべのうた』：一体の人形と綴る物語仕立てのコンサート。

チラシを観ただけで情報満載！そして魅力的で全てを拝見したかったのですが、今回は上演60分ほどの『オオカミだ!』を観劇しました。普段、主に親子向けの活動をしている自分にとっては一番興味深く、期待とワクワクで一杯でした。

会場に入ってみると舞台は平土間に、スクリーンを張った骨組みのセットが一つと机が一つあるだけ。一人で演じるには天井も高く広々とした空間！でも、そんな心配はいらない！

ケッチが出てきて歩いているだけで、その風貌や動きがとても面白い。存在感がある。流石、パントマイマー！身体が自由だ！時にはウクレレを弾き、得意のパントマイムで笑いをとる。トランクが重くて持ち上がらないというパントマイムでは、トランクを持ってみたい子どもたちを招く。声かけすると、体験してみたい子どもたちの手が我も我もとさっと上がるのは見ていて微笑ましい。体験者はケッチからシールを貼ってもらえる。色々参加し

たい子どもたちは後を絶たず、子どもたちには勲章と同じ価値なんじゃないかなあと思いました。

会場が温まり、先ず紙芝居屋さんのように机の上の紙芝居を使いオオカミや、こぶたをマイムで演じながら「三匹のこぶた」の話を伝える。その絵はスクリーンに映すので、大きく見せてくれます。この紙芝居の絵は、色彩もはっきりしていて良いなあ、どこかで見たことがある・・・と思っていたら、某コーヒー屋さんの紙袋のデザインをした方の絵でした。オーバーオールでオオカミの尻尾と耳を付けたケッチが、アレンジした「三匹のこぶた」の話をマイムで、大きく表現してくれます。藁のおうちや木のお家を「ふーふー」と吹くだけではなく、うちわで扇ぐのですが、ここでも観客の参加型になります。指名された人だけではなく、参加したい子どもや大人が多く、うちわが足りなくなり袖に未だ袋に入っている新しいうちわを取りに行くハプニングも楽しい。こぶたを追いかけ迷い込んだレンガのお家はとっても広いお家の様で、一室一室こぶたを探し、壁が迫ってくる仕掛け部屋に遭遇したりする。

全てケッチのパントマイムで表現するのですが、其処に壁や迷路のような通路が見えてきます。いつの間にか広い空間は、すっかりお話の世界になっているのだと認識しました。

こぶたのペープサートを巧みに使うアシスタントも息がぴったりで素晴らしかった！逃げるこぶたと追いかけるオオカミのリズムが心地よく気が付くと主人公のオオカミに気持ちが寄り添っていました。子どもたちも、シーンごとに声をかけたりヤジを飛ばしたり、でもオオカミに、こぶたが居る処を教えようとする、など。オオカミと共感していて賑やかな客席。

知っている馴染みの話がモチーフでも、大きなスクリーンで見せる紙芝居や、コミカルな音楽、そしてセリフのないパントマイム（擬音はあり(笑)）、観客の参加型で作られ、お話はとてつもなく広がり、別の物語に展開していく楽しい60分はあっという間に過ぎました。兎に角、遊び心がいっぱい！大人もいつの間にか童心に帰る要素がいっぱいで、間違いなく親子で楽しめる空間でした。そしてセットは簡単でも、舞台の芸術性を十分感じることができました。

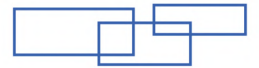
他の2演目、チェロの演奏や人形が綴る物語もぜひ観てみたかった！と、ヨルノハテ劇場さんが魅せてくれる演劇にとっても興味を持った夜でした。

文：川井真理子（まりこ☆みゅーじあむ）



©2024 ALL 金子裕美





1960年に神奈川県内で活動する劇団を中心に結成された神奈川県演劇連盟。今年で64年を迎えることとなりました。昨年度はケル・ベッパー、ドリル饅頭、Theater Company 夜明けの3団体が、そして今年度からは劇団年輪、劇団コピュラの2団体が新たに加盟致しました。

6月某日に開催された神奈川県演劇連盟総会。昨年度の実績や今年度の活動方針等が報告された中から記事を抜粋して掲載致します。

■役員体制

理事長： 緑慎一郎（演劇プロデュース『螺旋階段』）再任
副理事長：中山朋文（theater 045 syndicate）再任
坂下優一（劇団横濱にゆうくりあ）新任
事務局長：坪井俊樹（ケル・ベッパー）新任
会計： 穂村一彦（劇団「無題」）再任

■令和6年度神奈川県演劇フェスティバル

加盟劇団の公演を連続的にフェスティバル形式で展開。今年度は8～12月にかけて6公演が対象となる予定。お客様には観劇のメリットを分かりやすく揭示し、フェスティバル全体を盛り上げていきたい。

■第22回かながわ演劇博覧会

入場無料で一日に多くの劇団の公演を観ることができる企画。経験豊かなスタッフのサポートを受けられるため、立ち上げたばかりの団体でも参加しやすい環境である。2025年3月開催予定。参加団体募集は夏頃より開始予定。

■広報誌：DRAMAかながわ

神奈川県演劇連盟が編集、発行する機関誌。主な事業を特集した記事や、加盟劇団がお互いの公演を見て相互に批評し合う劇評などを掲載している。昨年度に引き続き、今年度も年3回発行予定。

■2024年度神奈川県演劇連盟合同公演

演目は脚本担当者話し合いをもとに決定する予定。TAK内の希望者を中心に出演者募集を行い、昨年度同様20名程度での作品を目指す。2025年3月上演予定。

■TAK in KAAT

2011年より始まったKAAT神奈川芸術劇場との提携企画。
『ヨルノハテのショーケース』担当：ヨルノハテの劇場。4月17日～20日上演終了。
『マリア・ルーズ号の夏』担当：劇団横濱にゆうくりあ。8月10日～11日上演予定。

■芝居塾2024

一般より塾生を募集し、6月22日～7月27日の毎週土曜に全6回の講座で役者の基礎、道具方、衣装、照明、音響、制作について学ぶ。成果発表公演として塾生中心のミニ公演を8月10日～11日上演予定。

■演劇資料室

知名度を上げ利用者数を増やすため、演劇資料室を使って朗読会や本読みワークショップ等の事業展開を考えていきたい。演劇関係図書、演劇雑誌のほか、プロ・アマ含めたさまざまな公演資料が収蔵されている演劇資料室はどなたでも閲覧できます。皆様ぜひご利用ください。

■マグカルシアター2024

神奈川県立青少年センタースタジオHIKARI、および、かながわアートホールで行われるマグカルシアター2024。今年度も多くの団体の上演を予定。参加団体と連携してスピード感のある情報発信を行うことで、上演の周知を努めていきたい。

■理事長：緑慎一郎より



現在、神奈川県が文化の活動を変えようとしている時期だと感じています。地域の部活動を開始するにあたり相談を多々受けており、その中で連盟が文化部の中で何を教えていけるのか模索しているところです。

これからも神奈川県の演劇を活性化させるため、楽しい演劇、プラス、地域の楽しい演劇作りを目指していきたいと考えています。神奈川県、そして連盟加盟団体と力を合わせて頑張っていきますので、皆様どうぞよろしくお願い致します。





一般から募った参加者と連盟所属の担当劇団が、キャストだけでなく舞台の裏から表まで共に芝居作りに挑戦する事業として2007年に始まった芝居塾。当初は高校生向けの企画でしたが、年度を重ねるにつれて形態も都度変わり、今年度は「参加者の年齢制限無し」として開催することとなりました。担当劇団は昨年引き続きG/9-Project。塾生には6回の講義を受講して頂き、8月に行われるG/9-Projectの本公演の合間に、「成果発表公演」としてご来場の皆様にも観て頂ける機会を作りました。

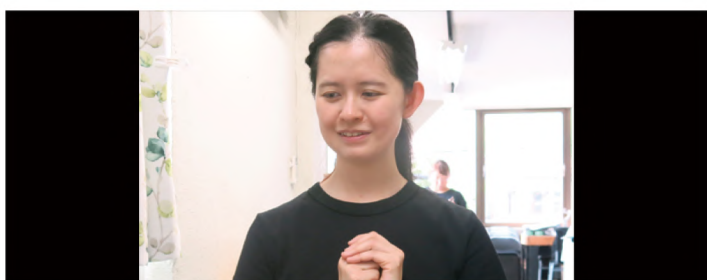
7月某日、いよいよ成果発表公演で何をやるのかを決める段階となった頃、稽古場にお邪魔してインタビューを行いました。

聞き手：オusstかのり（劇団かに座）



■仲尾玲二（G/9プロジェクト事務所代表）

第1回～第2回の講座では演劇のアウトライン（スタッフワークや脚本の書き方など）の講座を行いました。そして第5回目ではいよいよ役者にフォーカスを当てた講座を、第6回目は脚本に沿った稽古をやって成果発表公演へと臨む予定です。



■雅遊（みやび ゆう）（芝居塾2024塾生）

前回の塾生が、SNSで今年度の塾生募集を展開しているのを見て芝居塾を知りました。

もともと芝居経験はあったのですが、きちんと順序立てて芝居を学んだことがなかったので、実際に参加してみるととても勉強になっています。論理的な講座も含め、今までに無かった視点で演技を見つめ直すことができました。

上手な演技をすることはもちろん大切なことではありますが、観に来てくれるお客様に良い意味で「何か引っかかるもの」を残すことが出来るよう、自分自身の表現の幅を広げていきたいと感じました。



■那須野広行（なすの ひろゆき）（芝居塾2024塾生）

以前から脚本作りに興味があったのですが、いざ作り始めると分からないことだらけでした。そんな時にFacebookで芝居塾塾生の募集を知り参加しました。

いくつかの団体に客演したり、舞台を裏から見ていて何となく理解していたつもりでしたが、実際に講座を受けてみてあらためて演劇の難しさを感じました。

長い台詞を覚えるのがとても不安です（笑）。ですが成果発表公演といういいチャンスを頂きましたので、「口から出てくるように自分をだませ」と教わったことを生かせるよう頑張ります。皆様ぜひ観に来てください。



■横山ギンガ（G/9-Project座長）

年齢制限を撤廃したことで、昨年までとは違う雰囲気芝居塾となりました。講座を提供する側としても身が引き締まる思いです。

8月9日（金）～11日（日）にG/9-Projectの公演「12人の職員会議」があるのですが、その合間を縫って、土日の15時から芝居塾の成果発表公演を行います。G/9-Projectの公演でご来場頂くお客様も、成果発表公演のみでご来場頂くお客様も、無料でご覧になることができます。ぜひ観劇ください！

芝居塾2024成果発表公演

『OZ Episode:0』

開催日 2024年8月10日（土）15:00、
11日（日）15:00

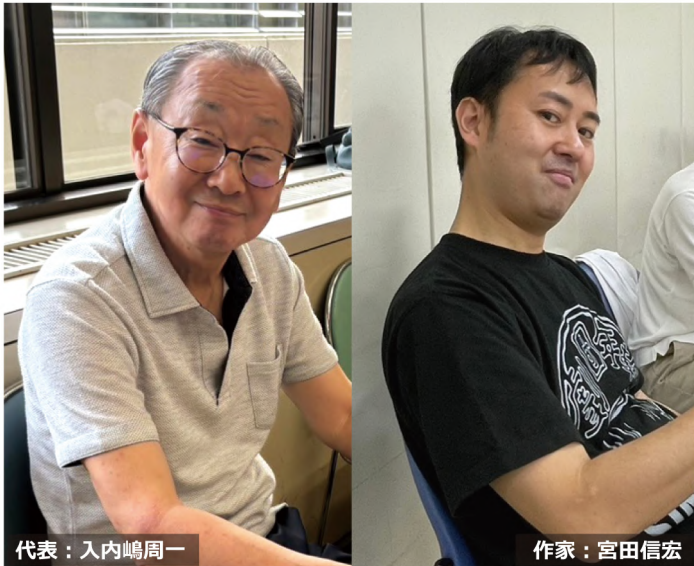
会場 山手ゲーテ座ホール
入場料 無料

G/9-Project公演「12人の職員会議」をご観劇頂く方はもちろん、成果発表公演のみでご来場頂くお客様も無料で観劇頂けます。



■劇団紹介

戸塚区を中心に活動を続け、来年50周年を迎える劇団です。1975年7月設立。代表は入内嶋周一。高校生、大学生、社会人、若手、中堅、ベテランと幅広い年代で構成され、現在の団員数は16名です。7月下旬の本公演と、3月上旬のかながわ演劇博覧会の年2回の公演を、団員作成のオリジナルの脚本で行っています。「楽しかった、面白かった、元気が出た」などお客様に感動してもらえる芝居創りを目指しています。



代表：入内嶋周一

作家：宮田信宏

■劇団名の由来

昭和48年、大学進学之年から、小学校の恩師と同期の仲間や後輩たち8名位が集まりボランティア活動を行っていました。旧戸塚区（現在の戸塚区・栄区・泉区）を中心に、子供会や障害者施設等へ行って、人形劇や影絵劇を見せたり、指人形や影絵の作り方を教えたり、一緒にゲームをしたりするなどの活動です。また児童劇の発表やそのための稽古の指導もしていました。

昭和50年になると「自分たちで劇団を創り、多くの人に楽しんでもらいたい」と話が進んでいきました。そこで劇団名をどうするかという議論になり、後輩の一人から「年輪がいいのでは」と提案がありました。年を重ねていくこと、年々大きくなっていくこと、少しずつ幹が太くなっていくことを願い「劇団年輪」と全員一致で名付けました。

■今後どんな劇団にしていきたいか

まず、年輪が限りなく続いていくこと。現在もそうですが、年齢も経験も異なる仲間たちが、お互いを大切にしながら、演劇への関心を高め、更に演劇を好きになり、お客様に感動してもらえる芝居創りをしていけたらいいなと思います。また、チャレンジ精神を持ちながら、進化、深化していきたいですね。

■作品づくりについて

年輪には大きなテーマが2つあり、1つはお客様に楽しんでもらうこと。もう1つは年1回の公演のため暗い気持ちにならない作品にすること。

僕たちの劇団はプロとは違い、別の世界にメインの仕事をもっている社会人劇団です。

見てくださるお客様も演劇人というよりは、友人だったり、家族だったり、あまり演劇を観たことがない方が多いので、エンターテインメントとして、面白い、楽しい、と感じてもらえるように工夫して作品づくりに取り組んでいます。



稽古風景

■劇団員の声

【代表】なんで劇団に入ろうと思ったの？

【おじゃ】大道具を手伝ってくれと誘われて、手伝いに行ったら役が決まっていた出演することになっていた。

【安藤】自分は今の代表が中学校の担任で前代表が小学校の担任だった。公演を手伝った後の反省会で来年できるか聞かれて、断ろうとしたら、断ってはいけない雰囲気を出されて、思わず参加すると答えてしまった。

【純光】昔はその手口？（笑）

【信宏】自分はホームページを見て入った。今は「劇団員になろうよ！」のサイトを見て入団してくれる人が多くなったよね。

【純光】自分は言いにくいなあ。家から近い劇団を探していたら年輪を見つけて…。

【綾奈】私も「戸塚・劇団」で検索したら、一番上にでてきたので…（汗）

【代表】でもさあ、入団を決めた決定打があるでしょ？

【純光】体験・見学してもらってことを一番強く打ち出したので、実際に体験してみたら雰囲気が合ってると思いました。

【綾奈】毎年新入団者は1名ぐらいですか？

【信宏】今年は新入団者が1名だったけど、多いときは8名入団してくれた。その年は入団希望者が多くて焦って募集を中断したんだよ。

【司堂】ブログなどを見て、雰囲気よさそうだなあと感じて見学希望しました。見学した後も結構な期間、悩んだんですけど稽古見学したときの雰囲気が良かったので入団を決めました。

【光璃】私は人見知りなので、知ってる人がいるところじゃないと…と思って。

【晴楓】私は姉がやってるのを見てやりたいと感じたのが強い。

【純光】俺も人見知りだったなあ。

【香菜子】あっちゃんも人見知りって信じられないなあ。

【代表】でもプロで演劇やってる人でも、結構人見知りだったって人は意外と多いよね。そういう意味では演劇って自分を変えるチャンスではあるよね。



座談会



■劇団の紹介

劇団コピュラ（代表：このかつゆき）は2016年10月に創設されました。様々な名前で行演イベントに参加していましたが、かながわ演劇博覧会への参加を機に固定の団体名を決定しました。劇団の活動拠点は主にスタジオHIKARIで、年に一回かながわ演劇博覧会に参加しています。代表作には、最新作の映像作品「訪問販売」、演劇作品「悪霊」（同名の有名作とは異なる）、「時間を巡る冒険～安楽椅子探偵篇～」などがあります。

劇団コピュラは、作品毎にメンバーをお招きする形式で、現在は一人で活動しています。作風は映像を用いた表現を軸に「不穏で不可思議な話」と「まじめにふざける話」の二つがあります。創作において最も大切にしているテーマは「自分が面白がるかどうか」で、重要な動機です。

■劇団名の由来

劇団名の「コピュラ」は「繋辞」を意味し、様々な言語で主語と補語（または述詞）の関係を作り出す動詞として用いられる言葉です。この名称はラテン語の「つなぎ」や「結び付き」を意味する名詞“copula”に由来します。

エピソードとして、はじめは「ゴールデンレトリバー」を団体名として提案したものの、当時のメンバーにすぐに却下されました。その後、別の言葉をピックアップしたリストの中に「コピュラ」がありました。「なんでコピュラなの？」と聞かれるたびに説明に苦心しているのですが、「コピュラ」自体には意味がなく何かと何かをくっつける時にだけ存在するものと解釈していて、自分の創作もそういうことだなと思い至り「劇団コピュラ」と名付けました。



■今後の公演情報

現時点で具体的な公演の予定はありません。次のかながわ演劇博覧会への参加を検討しています。ただ、この演博は人気が高まり、若い団体が利用するのが望ましいとも考えています。そのため、合同公演への参加も視野に入れていきます。また、自主公演の企画も進めています。

■将来の目標とやってみたいこと

生活が続けながら、細々と演劇も続けられる距離感で創作を楽しむことです。出自が映像畑であることから、将来的には映画を撮りたいと考えています。映画や映像に出演してもらえる役者と知り合いになるのが演劇をはじめた最初の動機でしたが、今ではすっかりその魅力に引き込まれています。底なし沼のようなもので、一度ハマると容易には抜け出せません。

今後は自主公演を打ちたいと考えています。8年近く活動してきましたが、一度も自身で公演を打ったことがなく、自主公演を打てばそれが「旗揚げ公演」となるのでしょうか。このまま一度も自主公演を打たずに終わるのは寂しいので、「解散公演」くらいはやっていいかなと思っています。ただ、一人で活動しているため、解散も何もありません。



■地元演劇連盟や地域との関係

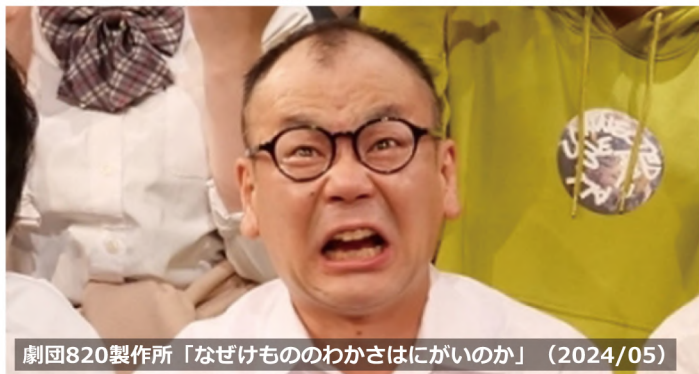
この個人的には神奈川県演劇連盟とは古い関係にあります。以前所属していた劇団が加盟していたため、総会などにも出席した経験があります。当時はご年配の方が多く、昭和から続く反骨の香りを漂わせており硬派な集まりでした。現行体制では若返りが図られ、世代が近い方々が集まり、以前よりもフラットで意見を申し上げやすい雰囲気になっていると感じています。ただ、これは自分が歳を取ったからかもしれません。

■地元演劇連盟や地域に期待する役割と今後の関わり

今後は演劇資料室や入場無料のかながわ演劇博覧会などを通じて、演劇に触れる機会を提供してきた神奈川県演劇連盟に加盟することで、その一助となれば幸いです。劇団コピュラとしても地域の演劇活動に積極的に参加し、支えていきたいと考えています。

■芝居づくりで大切にしていること

役者の自発的な作為や創作を大切にしています。演出をする際には、芝居そのものよりも、役者が自己を解放できるような稽古場づくりを心がけています。また、スタッフとの連携も重要視しており、舞台の完成度を高めるためにイメージの共有を綿密に行います。呼ばれた場合には、先回りして提案したり、相手の意向を汲み取ることに努め、期待に応えられるよう努力します。



資料室だより

演劇資料室からオススメの一冊

「わかりあえないことから -コミュニケーション能力とは何か」
(平田オリザ 著/講談社現代新書)

著者の平田オリザは、我々舞台を志す者にとって憧れの演劇人である。同時に、言語コミュニケーションの研究者としても知られる。劇団「青年団」の主宰であり、劇作家、演出家としてだけでなく、東京芸大、大阪大学で教鞭をとる教育者としての顔を持つ。コミュニケーションとそのツールとしての「言葉」について多くの例を引きながら、さまざまな考察と気づきを我々に与えてくれる。特に小学校の国語の教科書に言語を媒介とするコミュニケーションを学ぶ平田メソッドともいえるワークショップが盛り込まれていることは興味深い。考えてみれば、舞台に生きる者にとってコミュニケーションはもっとも根幹をなす表現上の概念であり、技術でもある。

言語コミュニケーションの実践について、我々は舞台での作品の具現化というプロセスを通じて体験的に身に着けていると思うが、基礎に立ち返って先入観や余計な思い入れを抜きに考えてみる機会をこの本を通じて得られるのではないだろうか。ある概念や価値観を説明するのにリアルな生活から拾いだしたさまざまなエピソードを使って読み進むほどに興味が増えていく。例えば本の後半で「落書き問題」というエピソードが紹介されている。ネット上で「学校の壁に落書きが多くて困る」という投書があった。一方で「落書きも表現の一つではないか。世の中にはもっと醜悪な看板が資本の力で乱立しているのではないか」という投書があった。「さてどうでしょう？」との設問である。これは、OECD（経済協力開発機構）が3年に一度実施している子どもを対象とする世界共通の学力テスト「PISA調査」に関連するエピソードである。日本の多くの子供たちは何を聞かれているのか分からないという。だって落書きは悪いに決まっているから。そこで平田は少し設問を変えて学生たちに問うてみる。「では、落書きが許される場合はどんな場合でしょう？自分のことでもいいし社会的な

感想でもいい。」

学生たちは、少し考えてから次のように答える。<その落書きを気に入ったら><芸術的な価値があったら><すぐに落とせるものなら><明日取り壊し予定なら>等々。そして数百人に一人くらい<独裁国家なら>と答える者がいるらしい。ここでの文言は「打倒〇〇体制」つまり、その落書きは多分命がけて書かれたものなのだ。それは、単なる公衆道徳上の問題ではなく、自分の属する国家への命がけのメッセージとなるのだ。国家体制が変われば、落書きさえも許される状況が世界にはあるということ。それを理解することで、平和の中に日々を過ごす者が見過ごしてしまうかもしれない、命がけの落書きメッセージを発信する人々がいるという現実。そこに思いを致す、その能力が異文化理解能力の本質なのだと言えよう。

この本は頭から順を追って読み進める、というよくあるスタイルは気にしないほうがいいかもしれない。8章で構成されている本書の特徴は、どこからどんな順序で読んでもオッケーということ。各章建ての中にちりばめられている見出しを手がかりに अच्छ行ったりこっち行ったり、「あとがき」から先に読んじゃうのもありかもしれない。つまり一番重要なのが目次なのだ。

文：吉浜直樹（劇団横濱にゆうくりあ）



目次

- 1章. コミュニケーション能力とは何か？
- 2章. 喋らないという表現
- 3章. ランダムをプログラミングする
- 4章. 冗長率を操作する
- 5章. 「対話」の言葉を作る
- 6章. コンテキストの「ずれ」
- 7章. コミュニケーションデザインという視点
- 8章. 協調性から社交性へ

演劇資料室

【開室時間】

平日（火曜～金曜） 13:00～22:00（貸出は21:30まで）
土曜・日曜・祝日（月曜以外） 10:00～22:00（貸出は21:30まで）

【休日】

月曜、年末年始

※上記以外にも休日がございます。

ホームページをご確認の上、お越しく下さい。

〒220-0044 神奈川県横浜市西区紅葉ヶ丘9-1

神奈川県立青少年センター2階 演劇資料室 電話：045-286-4485



神奈川県演劇連盟加盟団体（50音順）

- 演劇プロデュース『螺旋階段』 ■ケル・ベッパー ■京浜協同劇団 ■劇団蒼い群 ■劇団河童座 ■劇団コピュラ
- 劇団年輪 ■劇団820製作所 ■劇団「無題」 ■劇団横濱にゆうくりあ ■Theater Company 夜明け ■theater 045 syndicate
- G/9-Project ■ドリル饅頭 ■プラスチックな月 ■まりこ☆みゆーじあむ ■MPinK(ミュージカルプロジェクト in 神奈川)
- 横浜小劇場（横浜演劇研究所附属） ■ヨルノハテの劇場

DRAMAかながわ 92号

【発行】神奈川県演劇連盟（2024年7月31日）

【編集】オッサたかのり（劇団かに座）、吉浜直樹（劇団横濱にゆうくりあ）、穂村一彦（劇団「無題」）、
緑慎一郎（演劇プロデュース『螺旋階段』）、野比隆彦、中山朋文（theater 045 syndicate）

【ホームページ】<http://kenenren.org/>

